

ドングリ1粒から森を再生

様々な恵みをもたらす水源の森を再生しようと、NPO法人地球の緑を育てる会(本部・つくばみらい市、石村章子理事長)が筑波山で交流団体と続けている植樹活動が20年目の節目を迎えた。毎年多くの市民ボランティアが駆けつけ、1粒のドングリの実から成長した常緑広葉樹の苗木を植えていく。世代を超えた草の根の取り組みが森づくりの輪を広げている。

NPOら筑波山で植樹活動20年

「筑波山水源の森づくり」と掲げられた植樹活動は2006年にスタートした。針葉樹と広葉樹が共生する筑波山本来の姿を取り戻そうと、ふもとの圃場(はしやう)でスダジイやタブノキ、シラカシ、アカガシなどのドングリを3年ほどかけて苗木に育てる一方、筑波山中腹

苗木を植える子どもの表情は真剣だ。いずれも5月25日、つくば市



でスギやヒノキの間伐のほか、表土の流出を防ぐ土留めの設置などに取り組む。法人顧問を務めた著名な植物生態学者で、その土地本来の樹木を植える森づくりを提唱した宮脇昭・横浜国大名誉教授(故人)の残した「宮脇方式」の教えが活動の支えになっている。

今年の植樹活動は5月25日に行われた。早朝の筑波山神社に集まった約170人の参加者は植栽地まで山道を進み、50センチから1メートルの高さに成長した12種類、約600本の苗木を植えた。達成感から子どもたちからは自然に笑顔がこぼれていた。



①苗木を植える姉妹ら ②達成感からか、植樹に参加した子どもから笑顔があふれた ③苗木の植え方について説明を受ける植樹参加者たち

(床並浩二)